

JICA タイ事務所と連携した国際理解教育の実践

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）教諭
埼玉県新座市立第四中学校教諭 蓮池 理之

キーワード：国際理解教育、現地理解教育、国際協力、JICA、ODA

赴任校の概要（2023年4月現在）

学校名・日本語：泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）

学校名・現地表記：THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL

UR：<https://www.tjas.ac.th/>

児童生徒数 小学部 1752人 中学部 431人

1. はじめに

バンコクの日本人居住者は約7万人、大気汚染や衛生面など心配なこともあったが、基本的には日本と同じ暮らしができ、とても暮らしやすい環境であった。「微笑みの国」と呼ばれるタイ人の国民性は、とても穏やかで優しい。娘と街中を歩いていると多くのタイ人が手を振り、微笑みかけてくれた。バンコク日本人学校は児童生徒約2000人、日本各地から約150人の教員が集まり、刺激的な環境で勤務することができた。偶然、バンコクには過去4度も訪れたことがあり、大好きな国への派遣でもあった。

派遣前の2019年にはJICA 教師海外研修(パラグアイ)に参加し、原籍校ではJICA 出前講座を行うなど、国際理解教育を推進してきた。バンコク日本人学校では中学部研究主任として、日本での経験を生かしながら国際理解教育、開発教育の推進に努めた。特に担当した中学1年生の総合的学習の時間では「JICA に学ぶ国際協力—世界の課題と世界で働く人たち—」をテーマに JICA タイ事務所と連携し、約半年間のカリキュラムで授業を実践した。ここにその授業実践を報告する。

2. 授業の目的・目標

JICA タイ事務所の職員の方々による2度の講演会と JICA タイ事務所が関わる施設へのコース別校外学習(スワンナプーム空港、レッドライン鉄道、オリンパス研究所、ナコーンパトム豊学校)を通して、「国際協力」や「働く」とは何か、自分の将来や生き方を主体的に考えることを目的とした。また、担当した中学1年生の生徒たちは1学期の終わりや2学期のはじめにオンラインによる現地校との交流会、ジャカルタ日本人学校との交流会などで発表する機会を多く設けてきたことから、学んだことを「整理・分析」し、「まとめ・表現」するプレゼンテーション能力の向上も目的とした。以下3点が、設定した単元の目標である。①政府開発援助における日本とタイの関係を知り、国際協力の大切さに気づく。②「国際協力」・「働く」とは何か、自分の将来や生き方を考える。③聞き手を意識したプレゼンテーション能力、表現力を高める。

3. 事前学習

(1) 第1回 JICA・ODA 講演会

第1回講演会では JICA タイ事務所の次長に登壇していただいた。途上国の課題、国際協力の意義、日本の国際協力の取り組み、タイにおける日本の国際協力の成果についてなど、多くの話があった。実際に国際協力の最前線で仕事をしている方の言葉には重みと説得力があった。特に政府開発援助における日本とタイの関係の概要を知り、「開

発援助」は一過性のものでなく、未来にずっと続けていけるような「継続性」「持続可能性」が大切だと学んだ。

(2) 第2回 JICA・ODA 講演会

第2回講演会は校外学習の4つのコース別に JICA 職員の方々に講演していただいた。各施設の概要、開発における JICA の役割、開発援助における課題などを学んだ。特に国や文化が違う中でのコミュニケーションの取り方、折り合いの付け方など「国際協力」「開発援助」を行う中での苦勞や難しさについて具体的に知ることができた。

これらの事前学習を通して、講演を聞くだけでなく、現地調査の必要性を再認識した生徒が多かった。



第1回講演会の様子

4. コース別校外学習

学年8学級が2クラスずつ4つのコースに分かれ、現地調査を行った。私が担任する学級はレッドライン鉄道の関連施設を訪問した。

(1) バンスー中央駅

JICAをはじめ、三菱重工、日立製作所、住友商事などの日本企業が建設や開発に携わり、援助を行っていた。駅を中心部には日本とタイの友好と協力、日本の政府開発援助(ODA)の証を示した碑が設置されていた。

日本の「つくばエクスプレス」をモデルにして作られたレッドライン鉄道の車内には「HITACHI」のマークがあり、日本の電車とよく似ていた。優先席の表示には小さい子ども、妊婦の方、怪我をしている方に加え、monk(僧侶)のマークがあった。仏教を重んじるタイならではの優先席の表示である。また、よく注目してみると座席は日本のような布製ではなく、プラスチック製であった。これは「すぐに熱が逃げるため」「飲み物をこぼしてしまった時に清掃しやすいため」とさまざまな理由があるとのことだった。熱帯のタイでは、年間を通して気温が30度を超える日がほとんどで、水筒や購入した飲み物を持ち歩いている人が多い。そのための工夫であった。

生徒たちは主体的に日本との共通点や違いを発見し、「援助する国の気候や文化に寄り添った開発の必要性」を感じていた。



僧侶の表示がある優先席の表示



車内の座席

(2) ドンムアン空港駅

これまでは自家用車やタクシーなどの車でアクセスすることがメインであったドンムアン空港への移動が、レッドライン鉄道の開通、ドンムアン空港駅の開業によってバンスー中央駅から約20分で行けるようになった。交通渋滞が深刻化しているバンコクでは、自動車の排気ガスの増加により大気汚染が発生し、住民の健康面に悪影響を与えている。国際協力は「①政治②経済③教育④医療⑤環境」の5つの分野で考えなければならない。レッドライン鉄道の開通は、利便性の向上だけでなく、人々が自動車から電車へと交通手段を変えていくことによる環境問題の改善にもつながっていた。

(3) CT-Depot(車両車庫)

バンソー中央駅から車で5分ほど行ったところにCT-Depot(車両車庫)があった。

この車両車庫でも三菱重工、日立製作所、住友商事などの日本企業が関わり、車両点検などを行っていた。生徒たちは実際に車体や整備の様子を見ることで、「国際協力の現場では表舞台だけでなく、多くの人が関わり、目に見えない部分で支えていること」を感じていた。また、校外学習にはJICA職員の方々だけでなく、企業の方々にも同行していただいた。生徒たちが疑問に思ったことを質問する姿や積極的に写真を撮る姿が印象的であった。



レッドラインの車体と整備の様子

5. 事後学習

「日本はなぜ国際協力をするのか?」「なぜ日本はODAで他の国を援助するのか?」事前学習では、これらの問いを生徒に投げかけた。「同じ地球で生活しているから」「困っている人を助けるのは当たり前だから」「日本は戦争で多くの国に迷惑をかけたから支援する責任がある」「地球市民だから」など多くの答えが返ってきた。

事後学習では、事前学習で投げかけたこれらの問いと「国際協力」・「働く」とは何かについて、さらに考えを深めさせたかった。そこで、学年フロアを貸し切り、クラスの垣根を超えてポスターセッション形式でアウトプットする機会を設けることにした。ポスターセッションは計2回行い、1度目は授業参観の日に当て、保護者の方々にも生徒たちの学びの成果を見ていただいた。2度目のポスターセッションではJICA職員の方々を招待し、発表を聞いていただいた。生徒たちは事前学習や校外学習で学んだことや感じたことをポスターにまとめ、各グループ工夫しながら、聞き手を意識したプレゼンテーションを行っていた。実際の現場を見たり、他のコースの発表も聞いたりすることで、「日本はなぜ国際協力をするのか?」「なぜ日本はODAで他の国を援助するのか?」、日本の国際協力の必要性や課題について考えを深めている生徒が多くいた。生徒一人ひとりの1年間の成長を感じた瞬間でもあった。

6. おわりに

JICAタイ事務所を連携した本授業実践は、政府開発援助における日本とタイの関係、国際協力の大切さなどについて生徒だけでなく、我々教員にとっても多くの学びがあった。また、机上の学習だけでなく、実際に現場に行き、「本物を見る、本物に触れる重要性」を感じることができた。

国際協力の最前線で働く方々の話を聞き、これまで学んできた「開発援助」についてのイメージが変化した。特にJICA職員の方が「常に途上国の人たちと一緒に働くので、お互いをよく理解することが重要」と話していたことが印象的であった。他者を尊重する態度を持ち、異なる文化の中でコミュニケーションを取ることの重要性と難しさを再認識した。異国で生活し、日々さまざまな文化の違いを体感している生徒たちにとっても、多くの学びがあったと感じている。私自身も教育現場からできることを行っていくことはもちろんのこと、実際に現場へ行って開発援助に携わりたいという気持ちが強くなった。

「開発援助では先進国と途上国の両方の経済発展に必要なことをする」という話もあった。他国への開発援助はぐるっと回って日本に返ってくる。例えば、スワンナプーム空港の開発援助をしたことで、タイと日本の行き来が活性化し、それが観光収入にも繋がっている。今後の授業実践では、経済や観光の視点から、「国際協力」や「開発援助」を考えさせてみたい。また、事前学習で行ったフォトランゲージ、クラスごとにテーマを割り振ったグループ解決型ジグソー学習、班活動、プレゼン発表、ポスター発表などの活動も今後も継続させていきたい。

本授業実践を通して、タイと日本の深い繋がりを感じることができ、新しい世界を見ることができた。タイ現地で収集した教材を活用し、国際理解学習、開発教育の授業実践に生かしていきたい。また、派遣期間中、小学5年生の

担任、小中連携事業で小学 5、6 の社会科の授業を担当するなど日本ではできない経験もした。ここに来たからこそできた貴重な経験を胸に、今後も様々なことにチャレンジし、自身の経験を目の前の子どもたちへ還元していきたい。